
主はやての好きなところ

虹鮫連牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

主はやての好きなところ

【Nコード】

N7026T

【作者名】

虹鯨連牙

【あらすじ】

主はやての好きなところ。あなたはスラリと言えますか？

「はやての好きなところはあ……やっぱり、優しいところだよなあ。
あ！ あと料理がギガうまだな」

とはヴィータ談。幼子のような容姿と、時折子供らしさを感じさせる素直な性格のせいもあってか、はやてにはとりわけ妹のように可愛がられてきた故の回答だろう。

「はやてちゃんの好きなところは、可愛いところですよ！」

とはリイン談。日頃からはやての側にいる彼女だ。ある意味で母でもある主には、つつい甘えがちである。それ故に、リインの言った「可愛い」には、言葉以上のものが含まれている。

一日の仕事を終えた彼女達、通称“八神一家”と呼ばれる面々は、夕飯と一緒に食べようとして管理局本局内にある局員食堂にやって来ていた。

その団欒の中でふと話題に上がった話。それは、『主ははやての好きなところ』というテーマだった。

丸いテーブルを囲んで座る彼女達は、目の前に並べられた料理を食べながら、各々がテーマに関して回答していくという形で盛り上がっていた。

ただ一人を除いては。

「二人ともありがとうなあ。でも、目の前で言われると何だか恥ずかしいなあ」

ヴィータとリインの言葉を聞き、当の本人である八神はやては頬を赤らめて微笑んでいた。

「さあ、次はシグナムの番よ」

シヤマルの言葉に続き、全員の視線が守護騎士の将に向けられた。

「……………あ、いや」

「何だよ、早く言えよお」

ヴィータが野次ると、シグナムは目の前の Pasta に視線を落とし

ながら固まってしまった。

何て言えたいのだろうか？

実は、そんな思いがシグナムの頭の中をぐるぐると渦巻いていた。主はやての好きなところを挙げると言われても、言葉が出てこない。

「シャ、シャマルから言ってくれ」

「え？ 私はもうさっき言ったわよ？」

「……………そ、そうだったか？」

全員の視線がより一層強く向けられている気がした。まるで全身を串刺しにされているみたいで、本当に息が詰まり始めた。

主はやてが嫌いなわけではない。当然だ。守護騎士の中でも特に忠義を重んじるシグナムがはやてを嫌うなど、たとえ天地がひっくり返っても有り得ないことなのだから。

それに、彼女等ヴォルケンリッターにとって、八神はやては特別なのだ。

夜天の書の主に付き従うことが元々の存在意義であり、単なる一プログラム体に過ぎない存在であったヴォルケンリッターを、初めて“家族”と呼んだ主人こそが八神はやてである。

彼女と守護騎士達の間にあるものは、本来の主従関係はそのままに、しかしそれを超越する固い絆であった。

だから守護騎士のリーダー格であるシグナムは、義理や使命感を抜きにしても、はやてのことが大切であることは間違いないのだ。

そんな彼女だが、

「早く言えよ」

「うるさいぞ、ヴィータ」

なかなか主の好きなところが言い出せない。

真っ赤になった顔を隠すように、更に深く俯くシグナム。

「シグナム、もしかして恥ずかしいのか？」

シグナムの耳元で、アギトが小さく囁いた。

その言葉にすらも答えを返せないでいるシグナムは、ふと、テーブルの下にいる仲間の姿を見つけた。

「そうだ！ まだザフィーラが答えていないぞ！」

「お前何テンパってるんだよ？」

ヴィータが目を点にして視線を送る。

シグナムは安堵のため息をつきながら、額の汗を拭った。

助かった。ヴォルケンリッターの中でも自分と同じぐらい厳格なザフィーラなら、きっとこの気持ちを解ってくれることだろう。

そう思いながら、シグナムはお茶で乾いた喉を潤した。

名前を出され、テーブルの下で夕飯を食べていたザフィーラは姿を出すことなく言葉を発する。

「主は、ただの道具でしかなかった私達に命を与えてくれた人だと考えている。そして主はやたと過ごした日々を思い出せば、それは間違いではないと分かるはずだ。こうして共に食事をしているだけでも、私はそれを強く実感できる。そんな主に対して抱く今の私の感情こそが、“好き”というもののなのかな」

え？ 言っちゃうの？

シグナムが固まった。

「相変わらずザフィーラは固いなあ」

そう言いながらも、はやては満面の笑みを浮かべている。そして同様に、他の守護騎士達も顔を見合わせて微笑んだ。

ただ一人を除いては。

「き、貴様！ ずるいぞ！」

「何？」

「それは、私が言おうと思っていたのだ！」

啞然とするザフィーラは、ぽかんと口を開け放して固まった。

「ええい！ もういい！」

そう言い放ったシグナムはそのまま席を立ち、背を向けて歩き出した。

「ちょっと！ 何処に行くのよ！？」

「シグナム！？」

一度だけ足を止め、シグナムは言った。

「少し時間をください。後ほど戻ってきます」

食堂を出たシグナムは、本局内のある部屋の前までやって来た。シグナムは自己嫌悪に苛まれていた。

まさか、自分が何よりも大切に思う主はやての、好きなところを伝えることが出来ないなんて。

何故なのか。アギトの言う通り、恥ずかしかったというのも確かにそうなのだが、他の守護騎士達が何の躊躇も無く言つてのけたことを、一人だけ口にすることが出来なかったことが悔しかった。

そして、そんな情けない自分が許せなかった。

「私はヴォルケンリッターの将だぞ。それなのに……………くっ！」
激しく自分を責めながら、シグナムはその部屋の扉を開いた。

さっきは情けない姿を晒したが、この扉の向こうにならきつと答えはあるはずだ。そう思って、シグナムはここにやって来た。

彼女を照らす希望、彼女を導く真実。

そう、彼女を救うこの部屋の名は、

「ん？ やあ、シグナムじゃないか。珍しいね、君が来るなんて」
無限書庫。古今東西のありとあらゆる情報が集まる巨大データベース。

そして扉を潜った彼女を出迎えたのは、無限書庫の司書長であるユーノだった。

「今日はどうしたの？ 一人で来たのかい？」

ユーノがシグナムの背後をキョロキョロと見て回った。

「ああ、実はちょっと頼みが……………ん？」

今度はシグナムがユーノの背後に視線を向けると、本棚に囲まれた縦長の空間の奥で、本を見て回る人影を見つけた。

「今、なのはとヴィヴィオが来てるんだよ。呼ぶかい？」

「そうなのか……………いや、いい。それよりも至急調べてほしいことがあってな」

「分かった。任せてよ！」

そう言ったユーノは、足元に魔法陣を展開した。

それから目を閉じて深く呼吸をした後、そのままの姿勢で言った。
「検索魔法を掛けるから、調べたい事柄のキーワードを教えてください。
データベースからキーワードに関連しそうな資料を探し出す
からさ。未整理分に関してははっきりと言えるわけじゃないけど、
見つければすぐに取り出せるよ」

シグナムは少しだけ間を置いた。いざ言おうとすると、やはり少し恥ずかしい。

こみ上げてくる恥じらいを咳払いで追いやり、毅然とした態度で
言い放った。

「では言うぞ……………『主はやて』、『好きなところ』。この二つ
で検索してくれ」

「え！？ 出るわけないよっ！」

ユーノが目を見開いて驚く。

しかし、シグナムにも余裕が無かった。食堂では主を待たせたまま
まだ。

「そんなはずはない！ 無限書庫にはあらゆる情報が集まっている
はずだ！ 早く検索してくれ！」

「そんなこと言ったって」

「頼む！」

シグナムが深く頭を下げると、ユーノは戸惑いを見せながらもそれ
以上断ることはしなかった。

困惑した表情のユーノと、嬉しそうに微笑むシグナム。

ようやく、これで食堂に戻って主はやてに想いを伝えることが出
来る。

シグナムはそう確信した。

「……………一応検索したけど」

「どんな資料が見つかったんだ？」

しかし、ユーノは首を振った。検索結果はゼロ件だった。

歯を食いしばって唸った後、次なる指示を出すシグナム。

「では次だ！ 『主が好き』、『その理由』だ！」

「ええ！？ 絶対出ないよ！」

「いいからやれ！」

再びユーノが検索をかけると、数秒後に本棚から一冊だけ本が抜け出て、二人のもとへと近づいてきた。

「来たか！」

近づいてきた本は、勝手にページを開いて中身を曝け出していた。どうやら、ヒットしたキーワードと思われる部分のページを開いて見せているようだ。

「資料というか………古代人の間で広まっていた伝言板の記録がヒットしたみたいだよ」

「伝言板？ 見せてくれ」

開かれた記録書を見ると、そこには擦れたような古代ベルカ文字で、文章が綴られていた。

『ちよつとオススメの書物教えてくれない？ 暇だから読んでみる』

『これは？ “日々狩る本気狩る命取り^{タマ}ます”。聖王の側近が書いた短編二次巻物だけど』

『オリ主が好きになれなかった……』

『その理由は？』

『テンプレ過ぎる聖王安チだった』

肩を震わせながら、シグナムは本を投げ捨てた。

「ええい！ ロクでも無い！ もっと、主のどんなところが好きなのかを事細かに解説した書物はないのか！？」

「お、落ち着いてよシグナム！ ってか、そんなのあるわけないよ！」

「こんな書庫！ レバンティンで焼き切ってくれるわ！」

もはやユーノは半べそ状態だった。

しかし、時間が刻々と過ぎていく度に、シグナムの苛立ちは大きくなっていく。

何としてでも、自分が主を好いている理由というものを見つけなくては。

そう思っていると、シグナムはあることに気が付いた。

そうだ。たった今、この場に答えがあるじゃないか。

「ユーノ」

シグナムがユーノの名前を呼ぶと、ユーノは肩を跳ねさせて驚いた。大方、また無茶苦茶な検索をさせられると思ったのだろう。

しかし、シグナムは先程の剣幕など何処吹く風と言った表情を浮かべ、落ち着き払った様子で言った。

「な、なに？」

「お前、なのはが好きか？」

「な、な……何を言ってるんだよシグナム！？ さっきからどうしたのさ！？ おかしいよ！」

「では嫌いか？」

「嫌いじゃないよ！ 全然嫌いじゃないけど！」

「どういうところが好きなんだ？」

「え！？ いや……ちよ………何こんなところで」

なかなか答えないユーノ。そして、そんな彼に詰め寄るシグナム。早く答えろと、シグナムが無言の圧力をかける。

しかし、シグナムが近づけば近づくほど、ユーノの額には大量の汗が浮かび上がっていき、彼の呼吸は大きく乱れた。

だがそれはシグナムも同じだった。時間が過ぎれば過ぎるほど、シグナムの眉間に皺が増えていき、彼女の呼吸は荒々しくなった。

その時。

「あ、シグナムさーん！」

「こんばんはー」

なのはとヴィヴィオが近づいてきた。二人は仲良く手を繋いでいる。

なるほど。と、シグナムはここにもヒントを見つけた。

「ヴィヴィオ、一つ聞きたいのだが」

「はい？」

「なのはのどんなところが好きだ？」

「ママの好きなところ？」

ヴィヴィオが人差し指を顎下に当てながら、視線を頭上で泳がせた。

その隣では、ユーノが頭を抱えながら悶えている。

「お前がなのはを好きな理由だ。言ってみろ」

ヴィータがはやてを褒め称えたような、明確な理由を期待した。しかし。

「えっとねえ、おいしいキャラメルミルクを作ってくれるところ」

「そういうのはもう出た！」

「え？ 出たって？」

「他には無いのか？」

リインがはやてに甘えるように、至極単純なものでもいいから期待した。

「キレイなのはいつもだけど、たまに可愛いところ」

「それも出た！」

「え？ だから何が？」

「本当に好きなところは何なんだ！？」

ザフィーラが悟り感じたような、核心を突いた納得のいく理由を期待した。

「ぜんぶ」

「……………何？」

「ぜんぶ好き」

それは、正解として成り立つのか？

シグナムの思考は完全に停止してしまい、その答えの意味を考えることも出来ない。

全部好き？ それでは理由も何もあったものではないじゃないか。シグナムの異変に気が付いたのか、なのはは心配そうな表情で声を掛けてきた。

「シグナムさん、どうしたの？」

「全部好きって………どういうことだ？」

ヴィヴィオが服を引っ張っても、なのはが幾ら声を掛けても、シグナムの意識は完全にどこかを彷徨っていた。

さっぱり分からない。答えがどこにあるのかも、どこから手を付ければいいのかも分からない。そんなシグナムの精神状態は、まさに無限書庫の中にいる彼女そのものであった。

そんな時、シグナムはあるものを見て意識を引き戻した。

気が付いたのだ。今のユーノの状況こそ、まさに食堂での自分じゃないか。

これは一体どういうことだ？

ユーノはなのはの好きなどころを言うことが出来ないじゃないか。しかし、誰もが口を揃えて言っている。ユーノは間違いなくなのはが好きだ、と。

では、何故彼はなのはの好きなどころを、なのはが好きな理由を口にしないのだ。

やはり答えは彼が握っている。

シグナムは突然動き出し、呻き声を上げながら書庫内を漂うユーノの両肩を掴んで揺さぶった。

「教えろ！ お前は何故なのはの好きなどころを言えないんだ！？」

「え！？ シ、シグナムさん！？」

ユーノも我に返った。

「ええ！？ シグナム、こんなところで何を！？」

タイミングなど知るものか。シグナムは、もう一度激しくユーノを揺さぶって言った。

「言え！ 言うんだ！ どんなどころが好きなのかどうして答えられない！ その理由を言うんだ！」

青ざめるユーノ、赤面するなのは。

もはや己の救済しか見えていないシグナムと、そんな大人達の姿を冷静に見届けるヴィヴィオ。

「ぼ、僕は、その……あの………な、なのはっがガガガ、ぜ……あの」

「ちょ、ちょっとユーノ君!? ユーノ君ってばぁ!」

「教えろお! ユウウノオオオオオッ!」

「そんなの、ここでは言えないよお」

最後に言葉を発したのはヴィヴィオだった。

全員の動きが止まり、同時に時間が止まったかのような沈黙が訪れる。

最初にその沈黙を破ったのは、シグナムだった。

「何故だ?」

「だってえ、そんな簡単に言えることじゃないから」

再び沈黙が流れる。

シグナムにはまたしても難しい言葉だった。

しかし、その一方で何か光が見えた気もしたのだ。

答えも、手を付ける場所も分らないで途方に暮れている自分の頭上に、僅かだが差し込んでくるものがあるような。そしてその光からは、澄んだ空気が吹き込んでくるような。

「ヴィヴィオは、なのはのことが全部好きだと言ったが………」

「でも、直してほしいところもあるよ」

全部好きなのに、嫌なところもある?

「……………どういことだ?」

「そんな簡単に言えるほど、ちっちゃい気持ちじゃないってこと」

大の大人三人が混沌としている場を、僅か二言三言で鎮めた幼女。迷える者達を救済へと導いたその言葉は、まさに神からの告げ言か。彼女の放つ言葉によって平静を取り戻した者達は、己の愚かさ泣くため、その場で項垂れた。

恐るべし、聖王の器。

「ではシグナム改めて聞くで? 私の好きなところは?」

「主はやての好きなところは………ここでは言えません」

シグナムは微笑んでいた。

「何？」

「秘密って何？」

「本当は考えてないんじゃないの？」

しかし、シグナムは何と言われようとも落ち着いた様子できっぱりと言った。

「言えません」

何か満たされたような気持ちで食堂に戻ったシグナムは、はやての前に立って、堂々と胸を張り、自分が見つけた答えをようやく伝えたのだった。

他の守護騎士達は、それでは不服だと言わんばかりにしつこく文句を言い続けたが、シグナムはそれらの文句に対しても頑なに自分の想いで立ち向かう姿勢を見せていた。

そんなシグナムのことを見ていたはやては、他の騎士達に向けたような優しい微笑みを浮かべて、場を制した。

「もうええよ、皆」

そんなはやての姿を見て、シグナムは嬉しく思った。

やはり、我々の王は、主はこの人だ、と。

「シグナムの言わんとしていることは分かるから」

「分かるわけねえじゃん。言えないって突っ張ってるんだぜ？」

「そういうことやないんよ、ヴィータ。言葉にせんでも、ちゃんと聞こえとるって」

「主………」

思わず目頭が熱くなるような感覚に襲われ、シグナムは唇を噛み締めながら小さく頷いた。

良かった。やはり我々はただの主従関係にあらず。“家族”とは、これでいいのだ。

ヴィータが納得出来ないように頬を膨らませる横で、シャマルとザフィーラは顔を見合わせて微笑んでいた。

はやての顔の隣に、リインとアギトが並んで言った。

「じゃあ今度はあ、はやてちゃんが皆の好きなところを言う番ですう」

「私が？ ええよー、たくさん言っただろう？」

はやてが腕組みをしながら得意気な顔を浮かべた。

「お？ やる気満々じゃねえか！？ じゃあ、まずシグナムの好きなところから！ どうぞ！」

「胸」

「まだ部屋から出てこないの」

シャルの言葉を合図とし、ヴィータがはやての手を取った。

「はやて、もう一回謝りに行くぞ、ほら」

ヴィータに連行されながら、はやては「冗談のつもりやったんです……………」と零した。

シグナムの部屋の扉が固く閉ざされてから、既に三日が経過している。

<了>

(後書き)

※この作品は、アルカディアにも投稿しています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7026t/>

主はやての好きなところ

2011年5月31日08時40分発行